

## CSI 委託事業 海外出張報告書

平成 21 年 4 月 9 日

所 属：千葉大学情報部学術情報課  
 職 名：学術情報統括グループ一般職員  
 氏 名：武内八重子

下記の通り報告いたします。

期 間	平成 2 0 年 1 1 月 1 1 日 ～ 平成 2 0 年 1 1 月 1 3 日
出 張 目 的	Berlin6 Open Access Conference でのポスター発表、およびオープンアクセスに関する情報収集
用 務 先	Industrie-Club, University of Düsseldorf : デュッセルドルフ【ドイツ】
用 務	ポスターセッションで DRF の活動を紹介し、また欧州を中心とした諸外国のオープンアクセス活動の最新情報を入手すること
出 張 内 容	<p>11月11日(火)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・会議参加受付後、終日 基調講演、セッションを聴講。</li> <li>・Keynote1 : Microsoft Research の Tony Hey 氏の講演では、Open Access に関連する Microsoft の取り組みを紹介。SciELO では Microsoft が開発した Bilingual Viewer の利用によりアクセス数が伸びたと報告されていた。</li> <li>・Keynote2 : EC の Horst Forster 氏は、助成機関として助成研究のオープンアクセス (以下 OA) 義務化、調査機関として OA の影響についての調査を行っていることを報告。</li> <li>・Plenary Session 1 : blog で研究過程・成果を研究者自身が公開したり、生物学系の研究者が情報交換をする wiki (Open Wetware) などが紹介された。</li> <li>・Plenary Session2 : 欧米以外の各国事情で、SciELO の紹介、OA を行っているインドの出版社 (MedKnow) の報告などがあった。</li> <li>・Plenary Session3 : OA のコストとメリットに関するセッション。BioMed Central の Matthew Cockerill 氏からは OA 誌の出版コストなどを紹介、CERN の Salvatore Mele 氏は SCORP3 の内容と現在の進行状況について、JISC の Frederick Friend 氏はリポジトリのコストと効果についての調査報告。コストについては DRIVER、UK LIFE プロジェクトなどで報告書が出ているとのこと。</li> <li>・会議終了後、東工大の津久井祐子氏と University of Göttingen の Margo Barger 氏とリポジトリに関する意見交換。</li> </ul> <p>11月12日(水)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・午前中前半 : ポスターセッション。日本からは DRF のほか、SCPJ、北大、小樽商科大の IR cures ILL、千葉大のポスターも出展された。DRF のポスターに対しては、どういった運営体制であるかといった質問がされ、また日本全体のリポジトリの概況についてなどもあった。全体として、リポジトリに関するポスターは多くなかった。</li> <li>・Plenary Session4 : ファイルを共有するためのファイル形式の基準についてのセッション。Microsoft は Office Open XML を ISO に登録している。</li> <li>・Plenary Session5 : "reproducible research"についてのセッション。研究</li> </ul>

出張内容	<p>データを公開してお互いの研究に活用することが reproducible research、公開手段のさまざまな実践例が報告された。reproducible research のための EJ、web 上のコミュニティ、リポジトリなど。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Plenary Session6 : Euro.Edu.Res.Assoc.、Am.Phys.Soc.、Ling.Soc.Am. から学会関係者がそれぞれの学会の OA 状況を紹介。</li> </ul> <p>11月13日(木)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Keynote3 : Sopinspace の Philippe Aigrain 氏。OA によって発表の方法やコミュニケーションなど、研究環境が変わったという話。</li> <li>• Keynote4 : DRIVER の Wolfram Horstmann 氏。さまざまな視点からの OA の検証。特に DRIVER の活動に特化した話ではなかった。</li> <li>• Plenary Session7 : 研究助成機関の OA ポリシーについて。European commission、European Research Council とも、始めから OA 誌に投稿するか、一定期間内にオープンすることで、グリーン誌への投稿が望ましいとのことだった。</li> <li>• Plenary Session8 : 3つの学会の OA 状況に関する報告。</li> <li>• Keynote5 : Cornell 大学の Paul Ginsparg 氏。www の登場から、現在の OA 事情までの歴史を経験に基づいて語った。</li> </ul> <p>#会議の発表プレゼンテーション、ビデオは Berlin6 web ページで公開されている。 <a href="http://www.berlin6.org/">http://www.berlin6.org/</a></p>
出張成果	<p>欧州を中心とした Open Access に関する最新情報を入手し、またポスターセッションなどの場ではリポジトリだけでなく様々な OA の方法に関わる人と意見交換を行った</p> <p>報告 : 「Berlin6 Open Access Conference: Changing Scholarly Communication in the Knowledge Society」(第4回 DRF ワークショップ「日本の機関リポジトリとそのテーマ2008」2008年11月27日 パシフィコ横浜)</p> <p><a href="http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00051799">http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00051799</a></p>

- 【注】
- ◇ 会議、学会等に出席の場合は、講演、座長などの役割、会議概要などを明記する。
  - ◇ 聴講のみの場合には、会議における研究動向、企業や大学の動向、注目すべき発表、日本からの参加者など、会議内容に関する、より詳細な内容を記入する(スペースが足りない場合は、適宜、ページを追加)。